

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：32652

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2015

課題番号：25884061

研究課題名(和文) 18～19世紀イギリス演劇における女性表象の変遷

研究課題名(英文) The changing features of female representations in the eighteenth- and nineteenth-century English Drama

研究代表者

撫原 華子 (Nadehara, Hanako)

東京女子大学・人間科学研究科・研究員

研究者番号：80707943

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間内に、18～19世紀イギリス演劇における女性表象の変遷をたどり、18世紀初期には、活力に満ちた女性たちが、19世紀末までのあいだに、次第に自由を奪われていく傾向の一端を明らかにした。1720年代のシェイクスピア歴史劇改作では、英国の「強い」王の代名詞ともいえるヘンリー五世の武人としての側面が影を潜め、代わりに、女性たちが活躍の場を広げていることに着目し、同時代の政治状況を踏まえて論じた。1892年にロンドンで初演されたWilliam Poelによる翻案劇『モルフィ公爵夫人』のヒロインのセクシュアリティ表象が削がれている点については、初演当時の社会的文化的背景と重ね合わせながら考察した。

研究成果の概要(英文)：During the past two and a half years of this study, I explored the changing features of female representations in the eighteenth- and nineteenth-century English plays. While the representations of women in the adaptations of Shakespeare's English history plays in the 1720s tended to include their political involvement, the representations of the heroine's sexuality tended to be diminished or cut away in William Poel's adaptation of John Webster's *The Duchess of Malfi* staged in 1892. The research has so far revealed that although female characters had their vitality in the eighteenth-century plays, they gradually came to lose it by the end of the nineteenth century.

研究分野：イギリス演劇

キーワード：演劇 イギリス ジェンダー 女性表象

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、国内外で盛んに行われているジェンダー研究を背景に、それを演劇研究に取り入れる試みとしてスタートした。イギリス演劇の研究にジェンダー的観点を取り入れた先行研究の例としては、Alison Findlay, *A Feminist Perspective on Renaissance Drama* (Maiden, Mass: Blackwell P, 1999)があり、そこでは女性観客の視点が英国ルネサンス期の演劇における女性表象に与えた影響について議論されている。本研究では、この本の手法を適用する対象を、英国ルネサンス演劇から18世紀から19世紀にかけてのイギリス演劇にシフトし、さらに、この本ではほとんど導入されていなかった歴史資料を活用した。

(2) 本研究の着想に至ったきっかけは、研究代表者が2011年に提出した博士論文の執筆である。博士論文では、従来あまり研究されてこなかった1690年代から1730年代に書かれたジョン・ウェブスター改作劇を中心に、当時の演劇における女性表象を論じた。その時期の英国は、女性の識字率の高まりや女性観客の増加とともに、演劇界はじめ各方面で、先にも述べたとおり、女性が力を発揮し始めた頃にあたる。博士論文では、当時の社会的・文化的背景を示す一次資料を踏まえながら、それらの演劇作品中に、さまざまな形で、その時代の英国社会に存在していた男女のせめぎあいの有様が書き込まれていることを、主として女性表象に焦点を当てながら指摘した。

(3) 本研究では、博士論文で論じた内容をより発展させ、同時に、扱う時代のスパンを18世紀のみならず、19世紀にも広げ、より広範囲なものとした。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、18～19世紀イギリス演劇における女性表象の変遷をたどることを目的とした。研究の全体構想としては、17世紀から21世紀に至るまでのイギリス演劇における女性表象をカバーしたいと考えており、本研究では、そのうちの18～19世紀の部分を取った。

(2) 本研究では、18世紀から19世紀にいたるイギリス演劇を、社会や文化という広範囲なテキストのなかに捉えることを目指した。具体的には、ジェンダー的観点から、文学作品と歴史資料の両方を分析し、女性が社会的に台頭し始めていた18世紀初期から、女性が家庭の枠にはめられるようになる19世紀末までに、英国社会で生じていたと思われる、男女間のせめぎあいの表象を、当時創作された演劇作品内から探し、この男女間にみられる現象の実情を明らかにすることを目標とした。

3. 研究の方法

(1) 研究期間内には、「18～19世紀イギリス演劇における女性表象の変遷」の研究テーマに沿う形で、年度ごとにひとつずつサブテーマを設定して研究を進めるかたちをとった。具体的に設定したサブテーマは、1720年代のシェイクスピア作『ヘンリー五世』の改作と『ヘンリー六世』の改作における女性表象に着目する「ヘンリー五世の変容：1720年代英国社会における男女のせめぎあい」と「ウィリアム・ポエル(William Poel)による『モルフィ公爵夫人』改作における女性表象：1892年英国社会における男女のせめぎあい」のふたつである。

(2) 本研究では、演劇作品のみならず、演劇の上演資料や歴史資料も用いることで、実証的な方法をとった。

4. 研究成果

(1) 研究期間内に行った女性表象研究を通じて、イギリス演劇においては、18世紀初期には、活力に満ちた女性たちが、19世紀末までのあいだに、次第に自由を奪われていく傾向の一端を明らかにすることができた。具体的な個々の作品の分析内容は以下の通り。

(2) 2013～14年度には、18世紀イギリス演劇における女性表象研究の一環として、アロン・ヒル(Aaron Hill)の『ヘンリー五世』改作(1723)とセオフィラス・シバー(Theophilus Cibber)の『ヘンリー六世』第2部、第3部(1723)にて、シェイクスピアの原作に比べて、英国の「強い」王の代名詞ともいえるヘンリー五世の武人としての側面が影を潜め、代わりに、女性登場人物たち(ヘンリー五世の妻となるキャサリン、新しく創造されたキャラクター・ハリエット、ヘンリー六世の妻マーガレットなど)が、活躍の場を広げている点について、同時代の政治状況を踏まえながら調査した。本論では、シェイクスピア歴史劇の18世紀改作テキストにみられる対仏戦争的問題の表象を避ける傾向とヘンリー五世の戦功に関する記述を削除する傾向を、当時のウォルポール内閣がとった大陸での紛争への不介入政策と関連づけて解釈した。さらに後者のヘンリー五世の戦功に関する記述を削除する傾向を、女性登場人物と男性登場人物とのあいだの権力闘争と結びつけて論じた。学会での口頭発表を経て、2014年度に投稿した学術誌の査読において、ふたつの改作のテキストにみられる対仏戦争的問題の表象を避ける傾向を、当時のウォルポール内閣がとった大陸での紛争への不介入政策と関連づけて解釈する論について、「テキストを丹念に調査」しており、かつ、当時の政治「状況的に考えてもそれなりに説得力がある」とされたものの、ひとつの論に多くの指摘を盛り込みすぎており、

「不採用だが、当該年度内の再投稿も可」という評価だった。

(3) 現在、この論文の改訂を進めているが、ふたつの論文として発表する方針で準備を進めている。まず一つ目は、ふたつのシェイクスピア歴史劇改作中で政治的活躍もする女性登場人物たちの存在は、風習喜劇に出てくる女性像などとともに、英国近代市民社会における女性の台頭を示唆したものではないかということを描き、論証する論文である。二つ目の論文は、シェイクスピア歴史劇の18世紀改作テキストにみられる対仏を意識させる科白や設定を避ける傾向を、それらの作品の初演当時の首相ウォルポールの対外政策に呼応したものであるとして、論じるものである。このふたつの作品中の女性表象で最も注目すべき点のひとつは、シバーの『ヘンリー六世』において、マーガレットがヘンリー五世の科白をしゃべる箇所である。そこでは、シェイクスピア作『ヘンリー五世』において、ヘンリー五世がハーフラの戦いを前にして兵士たちに熱く語りかける科白(“Stiffen the Sinews, summon up the Blood [. . .]”)が、ヘンリー六世の王妃マーガレットにほぼそのままのかたちで与えられている。各論文では、この点を足がかりとして、論を展開する。すなわち、ジェンダー論的に考えれば、女性であるマーガレットが、男性登場人物ヘンリー五世の科白のなかでも最も雄々しく男性性を鼓舞する科白を語ったことは、ヘンリーの「強い」イメージがマーガレットに付与されることになったことを意味する。他方、対外政策として考えると、フランス出身の王妃マーガレットに、「ザ・イングランド」ともいえるヘンリー五世の科白を言わせるという改変は、マーガレットにつきまとうフランスの影を消し、彼女のイメージを「イギリス化」しようという試みにもみえてくるのである。

(4) このような18世紀初期のシェイクスピア歴史劇改作における女性表象の研究を補完し、18世紀演劇における女性表象の変遷を解明することを目的として、デービッド・ギャリックとジョージ・コールマン共作『秘密結婚』(1766)における女性表象の研究にも着手している。その研究成果については、日本英文学会全国大会において口頭発表を行うことが決定している。

(5) 2015年度には、19世紀イギリス演劇における女性表象研究の一環として、“Representing Female Sexuality on the Victorian Stage: William Poel's 1892 Production of John Webster's *The Duchess of Malfi*”と題した研究論文を執筆し、学術誌に掲載された。この論文では、ロンドンのOpera Comiqueにおいて1892年10月に上演された、ウィリアム・ポエルによる翻案劇『モ

ルフィ公爵夫人』(原作者は、17世紀初期に活躍したジョン・ウェブスター)における女性主人公のセクシュアリティ表象を、1982年の初演当時の社会的文化的背景と重ね合わせながら考察した。このポエルによる改作は出版されてはいないが、ロンドンのVictoria & Albert MuseumのBlythe Houseに所蔵されている、二冊のプロンプト・ブックが存在しており、本論では、それらのプロンプト・ブックを分析した。この改作のヒロインのセクシュアリティに関する本格的な研究は今まで発表されておらず、本論がその第一歩となる。

(6) ヴィクトリア朝期には、『モルフィ公爵夫人』の改作として、19世紀中頃に、リチャード・ヘンギスト(ヘンリー)・ホーン(Richard Hengist(Henry) Horne)によるもの(1850年初演)とジョージ・ダニエル(George Daniel)によるもの(1853年出版と推定されている)が執筆されているが、本論ではまず、ポエルのテキストの位置づけについて、このふたつの先行改作、およびウェブスターによる原作とも比較しながら、概観し、その後、ポエルの改作において、公爵夫人のセクシュアリティ表象が排除される傾向がみられることを指摘した。たとえば、ポエルの改作では、新床へと誘うのは、公爵夫人ではなく、アントニオであり、ふたりのキスは、唇同士ではなく、お互いの手に交わされる。また、原作にはあった公爵夫人が産気づく場面はポエル版ではカットされており、しかも、この夫婦のひとり息子の存在は、3幕の最後まで隠されている。本論の最後のセクションでは、この改作におけるヒロインのセクシュアリティ表象の社会的文化的意味を考察した。この改作に限らず、ポエルによる英国ルネサンス演劇改作では、ジョン・フォードの『心乱れて』改作、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』改作、『尺には尺を』改作においても、同様に、女性のセクシュアリティが隠蔽される傾向がみられることが、Blythe Houseに所蔵されている各作品のプロンプト・ブックを分析した結果、明らかになった。これらの改作は、それぞれ別々の劇団・劇場にて上演されている。そのことに鑑みれば、ポエルの『モルフィ公爵夫人』改作における、ヒロインのセクシュアリティ表象を排除する傾向は、特定の劇団や劇場の要請というよりは、むしろヴィクトリア朝の一般的な傾向と考えるのが自然であろう。その最たる例が、同時期に*The Graphic*に掲載されたトマス・ハーディ作『テス』におけるセクシュアリティ表象が問題視され、相当の修正を経て、世に出されたことである。ポエルの『モルフィ公爵夫人』改作は、偶然にも、同じく*The Graphic*に劇評が載ったが、その評者はセクシュアリティ表象についてはコメントを残していない。そのことは、この改作のセクシュアリティ表象のあり方が

当時の保守的な層には、受け入れられていたことを示している。しかしながら、そうした書き換えの結果、社会通念をもとめず、自らの信念を貫いた（原作での）公爵夫人の魅力は影を潜めた感否めない。そのことに加えて、「新しい女たち」が登場し始めていた当時のイギリス社会にあって、イプセン劇の上演などで革新的劇場として知られていた The Independent Theatre と連携して制作された、ポエルの『モルフィ公爵夫人』のヒロインが、彼女の革新性を削がれたかたちで舞台上に登場したことが、革新的な舞台を求めてその劇場に足を運んだ観客たちの期待に沿わなかったことが、興行的に振るわぬ結果を招いたことは、想像に難くない。

(7) なお、このポエルの『モルフィ公爵夫人』改作におけるセクシュアリティ表象に関する論文を作成するに当たり、ウェブスターの原作への理解、とくに原作におけるヒロインのセクシュアリティ表象への理解をより一層深めるため、ロンドンのサム・ワナメイカー・プレイハウスこけら落とし公演として上演された『モルフィ公爵夫人』を2014年2月に観劇し、その劇評を執筆した。その論考は、同年秋に発行された学会誌に掲載された。

(8) さらに、女性表象研究の一環として、日本の演劇における女性表象（とくに実在する近代の日本女性）をめぐる論考を執筆し、アメリカの学術誌に掲載された。18～19世紀の女性たちをめぐる言説や彼女たちの演劇における描写について、日英比較の視点を得るための重要な一歩となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

Hanako Nadehara, Women in Edo Japan: Contemporary Cinematic Representations, *Early Modern Women: An Interdisciplinary Journal*、査読有、Vol.10 No.2、2016、pp.135-42

Hanako Nadehara, Representing Female Sexuality on the Victorian Stage: William Poel's 1892 Production of John Webster's *The Duchess of Malfi*, *POETICA*、査読有、Vol.84、2015、pp.93-112

撫原 華子、サム・ワナメイカー・プレイハウスこけら落とし公演:『モルフィ公爵夫人』、*Shakespeare Journal*、査読有、Vol.1、2015、pp.69-72

撫原 華子、The Emergence of a New Woman: The History of the Transformation of Gracia、東京女子大学紀要『論集』、査読無、Vol.64、2014、pp107-19

〔学会発表〕(計 2 件)

撫原 華子、ファニーの憂鬱 ギャリックとコールマン共作『秘密結婚』の女性表象、第88回日本英文学会全国大会、2016年5月29日、京都大学吉田キャンパス

撫原 華子、ヘンリー五世像の変容と<新しい女たち> 1720年代シェイクスピア歴史劇の改作、第52回シェイクスピア学会、2013年10月5日、鹿児島大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

撫原 華子 (NADEHARA, Hanako)
東京女子大学人間科学研究科研究員
研究者番号：80707943

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：